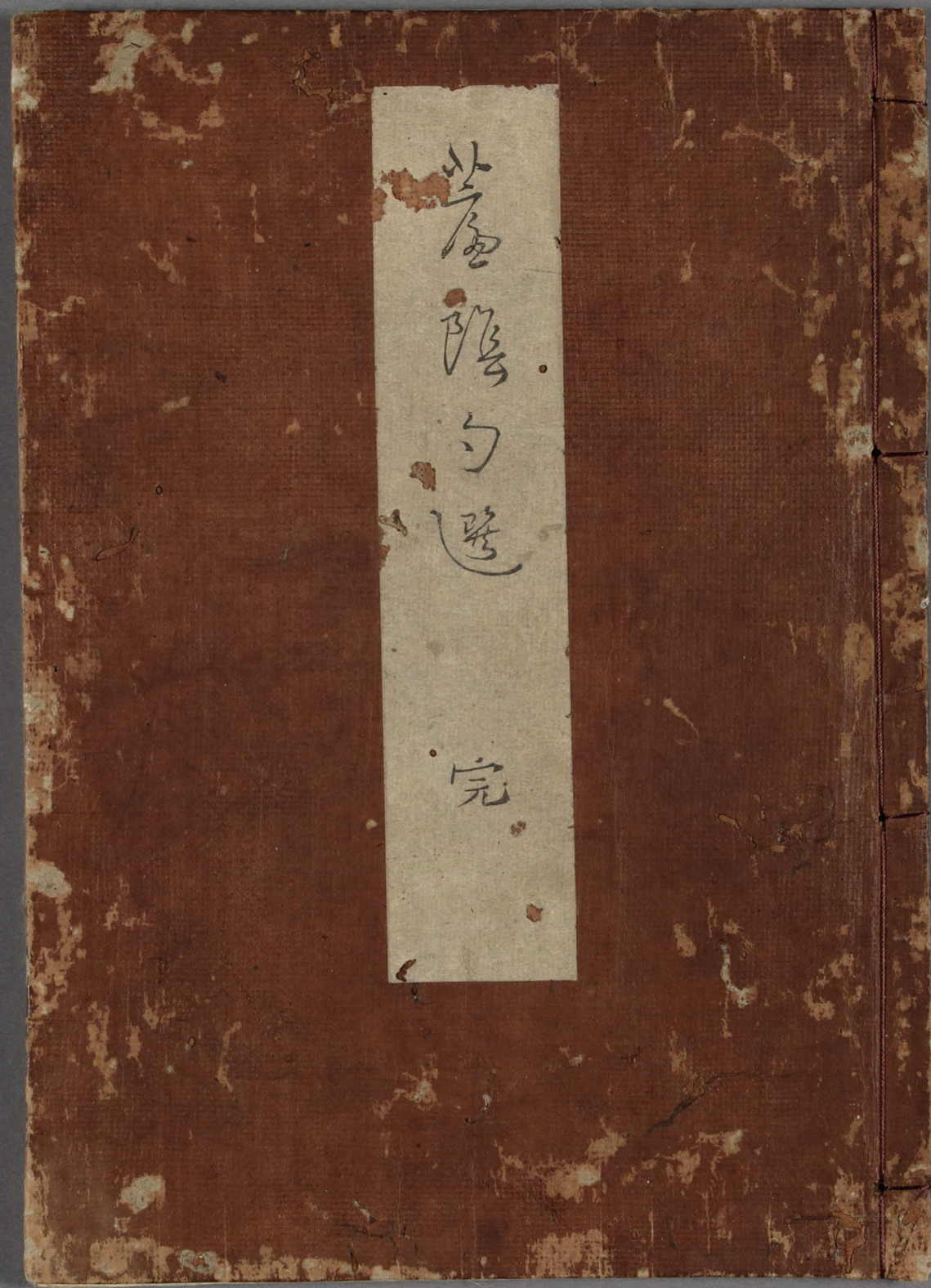
蕃隅勺選
完

ひ[illegible]丹作のさま大なる磐もる松さ
[illegible]
ゆ[illegible]
うんとい[illegible]
光[illegible]
ひて百[illegible]
日[illegible]
ら[illegible]

いよいよてくくとそそひこそそて大つ
ぶハまもそそうくなるめそちよちうんとそし
人も今ハさなあの相ひてさ終くなる
とうさふや大鼻ノ門流芦陰遺稿
といつまもと出さんとして序をかみとむ
ちく日き存ハ出さもあらまんいうく
まわ代者入きかしあるもの遺稿出て
還て生おのの声響を減するあをく
なるそそる大鼻ハとうく拉博徴隠ろ

一大氣と発して我門ろ嚢錐ろ
ふそそうの佳句秀作ハくおのく腸をす
たふ遺稿のいるを期をんやを遺
稿をもしてうの形ちる篇ノ倣ること
をふ門流背をひそそに草稿をあてめ
てはをを記して校合をめ彫刻ハよ
りるをうてみうひ序をかをもひこて
おこてやむをうをと取てその草稿を閉
ま市帯て曰を存出をしき存出て

くはよくそう完璧をとるに足し
先大尊の弟子ろ栄中まくそのひろと
かるるうにこん門流微笑して去さの
さとく又序とそ足し

寒泉已来多年　聚芳識

芦陰句選

春之部

初空や月のもとにさくらの毎
福寿草咲やはるの玉ゆらの影
　　四十九のとしの春
むらさきのきのふの雲の乃名
人妻の名ハ　左ゝ　御忌の名詣
　　高倉帝陵
宿直誰　陽ともなき谷

うらみたるの言葉に枝も幹も車
糸柳
崖ぶちに水をかけるの狂ひぶり
崖ぶちに水をかけるの柳の那

岡本結髪

妖婦や麿那の夕海ぶり
雨の梅ちるの配る蓮ぶり
黄昏や楫ぶりの窓の人
ちる時よ結ぶの糸の妙ぶり
沿花呉服町ふり居ぶり

野誘

ぶらぶらの梅一や芝居一やうの人
古草に陽炎ぶりの山路の車
物ぶりの人のぶり春の巨燈
仲春

ぶらぶらの人の公園ぶり
房総ぶりの夕や小田ぶりの蛙
雉啼やぶらぶらの人ぶり紀聞ぶり

双親の日ごろ面影彼岸哉
ちる花や蒙を古き越の雨
林ちる外
田の畦足ぬるるの水ゝ清
時雨はゆるく過る雑木野
うらゝを雨の過来る清水哉

帰雁

帰さを花と鳴るかの小田の丁
雲深ふる雨く鳴も日和哉

耕るや世移人の彩畑まで
ちるしら雲も春ぬ小艸哉
いとゞ雨ぬるる過やみを田遠
切り半の水あらいの雨や雲雀哉

涅槃會

尼寺の古ま添や 祇園人像
毒虫ぬ鼓ゆ寺書ぬ面

上巳

古雛や梅うるぬのうるぬ哉

難波津の名曲五のやうに底浦
ゝたて角ゝ〜に男鹿に
西風に逆らふ人生の
三月九の号庫七宮の
多くの礼所〜懺悔行
神輿御幸の行粧
ゆゝしき見物
糸桐神輿よかの人祭の郎
さゝもと又峠よりの花の
極さゝやかさ家建〜梓巫女

海を帆走て西の夕の郎
ゝ孔風中や沖中島の船多
足袋袴小石塚の蓮草
鼻緒よ抜うく春の詠の面
地蔵の〜庭掃き夕〜
人寺に寺に式部
能登の殿〜雪の暮れ来
多の殿のに駐殿部さ
山陰や蕎麦咲き色勇

ゆくすゑや故郷かすみ立ちかくし
松の有るうれしさもあの石垣ばかり

閑居三月の嶺

雲ゐ遠く春ふかまれる日数哉

春書京上りしゆ

筍の子成春ひとり祝ふ

うぐひすの山路ふ越て

ふる蛙ふりぬ世をうき投哉

夏之部

ほとゝぎす二羽帰ぬ世の日和哉

ほとゝぎす山伏い立て帰る寺

懐旧

牡丹折て父の恩を思ふ記

簾して厠うくきうぐひす哉

一ふくちて和の寿命哉

ふるゝ中に茅ぶれ出る菜

雨を帯し茅の葉よりもきのふ

雨霽ひの廿日ゆゑ牡丹を
お縫さんとふ事頂戴致さん

西行庵にて

人去て行のの力の茶碗
法師の花ちれる若葉うゑ
秋雨家ちかく留拾ふ
酢壺ゑん菊清水古寺
筆やひとちる射ゝ石鋪寺
ちゝ雲れ雨やいせんと

謝友人

雨のさゝ山ゝまを紅ゝ和歌
能の蓋ゝ好和宮様の事心

病中ゝ旅の三回忌ゝ弔ふ

人の為ゝ秋しゝ友書ゝ
夏ゝ花や小雀蝶ゝ仏ゝ
ゝ雨宮の大ゝ成ゝ手紙
草ゝ待世家中ゝ
美芋や中ゝ雨ゝ持ゝ屋の数

亡母忌當日略

首夏の今宵ひとし羽ばたき鳥
志仏して言の窓きす　蛍の車

ちるは雖一周諱

雨ふる音一とせさつもの那
友草や花ありあれし

重　五

ながれ懸ふりかたしもの
風下の黄麒麟寺や麦ほこり

懸ふる物ふる翁の那
坊中して師の坊とまつ塚居ル

感懐　句

法蓮庵ふ居ル五月の
ふるかけふ内ふて
乃ふて中ふる日
友ふふ下ふ

濁江の部ふ懐ふ五月雨
ふ中ふ百ふ少女脇ふ
中ふふ氏の漬加ふ

庭の年を切る節を寸
竹のふしをぬけて落れる旅のそら
妻恋う鶴の鳴渡る声
我ゆゑに羅や妻子を数の陰ふ
いつの世か出る
長明やうやうくらう皐月空
夏艸や行路荒く越す
中
艸や面白うて蛇蛻る
舎ふかう出くんを見る

麥の穂を車ふいく屋ふ
是ふていつ地ふを
我ふ問ふ春答
萍ふ蕎ふ咲ふ風沢出
右
新波を出る日一本亭の
賢長師ふを送れる
ふふふふふふふふふ
ふふふ
はふれふ毎ふふ蓑ふ下茅
なまふふ雷ふふ日ふ和ふふ

夜川や掉さす舟人さうそ
さゝ舟やこ線うちなる西の
河舟や井(チ)ゆまりの国のも
ゐしやや[illegible]こ爰拙さうこ
ゐ[illegible]の足引きの田植うた

京より遊のて

月ゝ鉾下りきり四ゝの親
ゝ[illegible]ふ旅人あり網[illegible]
夕[illegible]や治[illegible]古[illegible]

兵庫より稲
海[illegible]の[illegible]の[illegible]
午[illegible]
う[illegible]ふ童[illegible]
旅人の銭[illegible]清水[illegible]
悪僧[illegible]
[illegible]
西[illegible]
[illegible]師やたゝ寺日[illegible]

秋之部

さらさら川秋や荻々株数の音
蓮の花縁と成りし池乃蓮
浦遊初穐
涼しさも名も寺しまゝ朝乃浮
秋来風や木の葉の居る秋日和
病みし室に思ふ初秋
西日此穂浪ゆんゆゝゆ游秋

星合の名所なりけり川
船の寝棹よほし一夜
引や詩作娘つまのよ人

秋暑

賀茂の都えけし行つるは
涼しさや秋の月見に通ひ
まうれ女の玉姿集せ散花火
きれぬて澗も果ぬ木槿哉
とんぼうしやあるれをおくさいろく

[illegible]や施餓鬼の仮乃茶屋
僧正の楼寅さんの[illegible]
躍るや夕間暮して狂ふき
兵庫なる歟して
活動のうつす遊び浮の風
七人て巷の談や冥角力
やすてうつ(秋の夕月あれる)
稲妻の白ひく窓の美人哉

[illegible]や波うつる湯ケの闇
きのふうつ昊物よりうつる
鄙の晴[illegible]も住寺
老杜鄙なる秋風を人乃国に注
眼の涙も助ひく風の[illegible]
泡盛うつる西瓜哉

正名世代古作し賀

四畳半もとうつる秋を譲る栗
旅人よ何く花の茅よく秋

女鳴り兒啼きもの

[illegible]の米搗きものの豊の秋

秋興八句　家在紅塵陌

夜を相撲蛍を踊の哭さ[illegible]

草生ずる小園[illegible]

高秋の夕河の流れ　便

秋の河の河[illegible]世の人[illegible]遠さの河

出戸澱河流

[illegible]

夜坐書[illegible]

[illegible]秋の[illegible]

老杜の詩云[illegible]

[illegible]の秋[illegible]

一身百止変

[illegible]

園を辞して九[illegible]

門遠ク鳴ル都ヲ出テ一夜の秋

田家良夜

蛩カ〳〵の牧屋ヲ引ク音哀ナリ

名月や茅手拭ふ磨耶川

風ヲ待て自ラ見ル門葉哉

左樗ヤ月を西

追風や秋ヲ引ク角の走ル

中秋秋雲ヨリ来ル

鹿深ク山ヲ下ル敷馬の月清シ

野ヲ山ヲ雲引ク角鳴ル秋

山畠や茄子ヲ出ル蛍の風

山〳〵ヲ見上ル秋の空中ヲ引ク

鹿川や釜飛ル屋のあさ炊ぎ

芋菴小集

端ヲ出て主ヲ見ル月見哉

野風や大名連ヲ見て通ル

小原宮和歌山ヲ出るの秋ヲ連

宗祇は妻射ら作しは紀川居
并於草庵滑稽半軌
船毎に蒼菱嶋に月の出汐かな
十三夜二句
若るや兎落る家の空の水来
入中しぬの秋は長座の光を庵
月見る乃旅僧唯し居る秋空哉
両風に日和かゝる霞夜寒の邪
楼津もの中ちる秋かな

病ちゝぬ重陽り
ちかゑ見しらぬ寸菊の御薄を
くる筆を作らんと思ふ
まりての聖日より菊
つくまや
椋の花菊作り前にてとしらる
狗洲の菊見まかりもの人
茂稍や手の上中しく谷
うた秋しく響きまかへと見らる

雨の明一羽も多く鳴く蓑虫

家如武大工の陣に新宮の

惜秋

起出て自等人秋乃果

社に残月

残月や一枝の秋寒木の間より

冬之部

夢の覚てつるおもみやちの雨

秋時雨志賀山をめぐしく紅葉

慈樂寺仲宣寺にて初時雨

宮中

小蹄や多くの馬来る音

夢や宮仕食衣縫ふ居たす

聞雀

洛東金福寺芭蕉庵にて

撞鐘題

山畑や麦蒔人の小弘さし

椋ちよや掃をすす誰が為

霜に鞠す蟬鼓と掘りけり

あさ毎や田一道残る霜の市

病中京師の客舎より

祖翁の祥忌に勤ず

十月や霜ふる仏

梵論が笠ぬぎ置し一枯梧哉

夜

ともしびや小ふる華と蛍色

世の人寒鰥ふ夜の寒の郎

風や障るよりの一つるを吹

楠公碑

唖ゝと嬉鳥よりも言ふ

仏角如や千葉の暗き窓の機

我ものとうるる冬四季

呆れくる鷹の緒をくれ千鳥かな
ゆ世しれぬ都に追ふて河菜哉

深艸元政上人のもとにて
月雪に竹を笋ぬれかしかな
そ淵川尽れし雪の流れけり
山風や霧吹き廻る馬の耳
荒畠やたくみに霧乃折懇

船中
ゆく秋に漁火こほし寒かな

花の名残も色し野辺かな
埋火も栗の嵐乃いをりかな
眠さませし母のきせる蒲団かな

病まゐやうなる
京師に旅寝して
初雪やたゞ見る雲しや都の中
みなと小田舎まうけ住て
仏世の道見て心をの分
梅もまたゝ陽炎あり冬こゝ也

語不驚人死不休

[illegible]の墨を拭ひ[illegible]

年[illegible]内と書

[illegible]ふ春を[illegible]け[illegible]蓋の味

嫁婦や里のけふまで[illegible]

[illegible]皆[illegible]の家

我を[illegible]人も[illegible]

大曾[illegible]の京師[illegible]

夜半[illegible]の門[illegible]

[illegible]陰舎[illegible]

三[illegible]居[illegible]

[illegible]

知音[illegible]の去年[illegible]病[illegible]

再び[illegible]旅寓[illegible]

[illegible]八金福禅[illegible]

芭蕉居の[illegible]

なのといひて彩雲あらはれたりやと
見しも俳諧とて同じ続きの深き
かをもさんとて多く起即乃芳香を
投給へ色言あるのも新しきの
秋世をの奇跡に成きたれの
ろこひの山のほとりに七歌を詠
ひ色ろくて月日のつるまつ
跡なるもひしかるをひおをる句を
おくめ紀出くハ唯現に句ひ流る

やうにみハ生みをれ行まを
かゆ まをを行をいまをも原
やかて草行をを合をを世信
夕集を是乃旧識のくく
と志をを為ををををを
主をを原ををいをを行る

安永八巳亥仲秋望日

九董書

安永八己亥年霜月

浪速書肆　石原茂兵衛梓